



TITLE:

新出資料と羅越國問題

AUTHOR(S):

杉本, 直治郎

CITATION:

杉本, 直治郎. 新出資料と羅越國問題. 東洋史研究 1938, 3(3): 210-225

ISSUE DATE:

1938-02-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/145609>

RIGHT:

新出資料と羅越國問題

杉 本 直 治 郎

千載の昔、高丘親王(眞如法親王)が、金枝玉葉の御身にわたらせられながら、御高齡をも御厭ひなく、御入唐後、更に佛法の奥義を究め給はむとて、交通の不便な當時、一大勇猛心を起して、萬里の波濤を越え炎熱の地帯も物かは、萬難を排して、御渡天を決行遊ばされたが、不幸、中道にして羅越國で御遷化になつた。その羅越國が、何處であつたか。その羅越の名が何に基づいたか。かうした「羅越國問題」に就いて、私は、從來唱へられた諸説の中、我が國のもの五種、支那のもの四種、歐洲のもの十四種、合せて二十三種を拾ひ上げ、これらをば、本邦の記録、支那の文獻、並びに南海の資料、特に Arab 人の記録、馬來方面の材料などに照し、仔細に批判検討を試みた結果、羅越國は、馬來半島南端、即ち今のジョーホル (Johore [Johor]=柔佛) 地方にあつた、オラン・ラウト (Orang

Laut=海人)の國を指したものであり、羅越の toponym は、ethnonym としてのラウト人のラウトから起つたものに外あるまいといふ結論を得た。その詳細は、載せて『山下先生還曆記念東洋史論文集』別刷の拙稿「羅越國問題」中にあるが、該小篇は、昭和十一年十月十日の脱稿であつて、^①それ以後に成つた羅越國關係のもののは勿論、それ以前に出たものでも、當時未だ寓目を得なかつた爲め、前記検討の二十三種中に加へられず、遺されたものあるは已むを得ぬ。今それらの中、我が國のもの二種、支那のもの一種だけを補つて置かうと思ふ。

先づ我國のものでは、次の如きものがある。

I 羅越=Wurawari (Worawari) 説。これは、拙稿の成つた半ヶ月前、昭和十一年九月廿五日に刊行された、臺北帝國大學文政學部の『史學科研究年報』第三

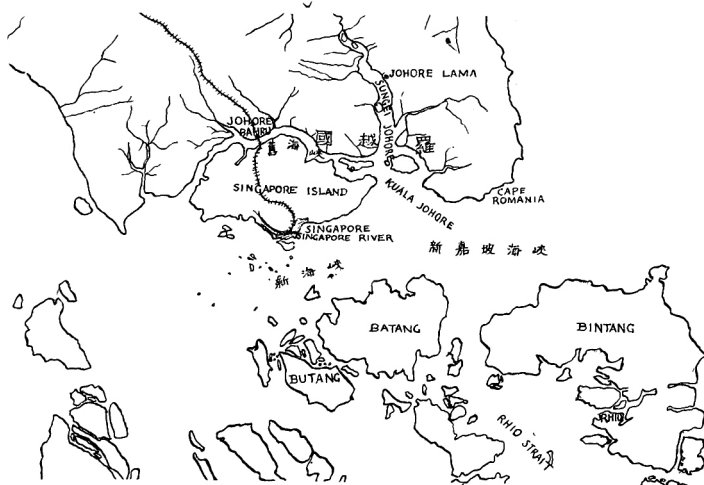
輯に收められてゐる、桑田六郎教授の力作「三佛齊考」中に見出されるものである。

Ⅱ 羅越 Ⅱ Rhio (Riouw) 説。この説は、南條蘆夫氏が、昭和十二年五月十四日より同十六日に至る、三回に亘つて『中外日報』紙に寄せられた、「南冥悲史の人、眞如法親王」の中で、主張されたところである。

次に支那のものでは、

Ⅲ 羅越 Ⅲ 馬來半島南端柔佛説。馮承鈞氏の『中國南洋交通史』(上海、民國二十六年一月、頁四四及び二四一、注二)に繰返し見えるもの、これである。

羅越國の位置の點より見ればⅠは、Singapore 説でもあり、Malay 半島南端 Johore 説でもあり、或ひは兩説を「一つに考へてよいかも知れぬ」といふ、一種の折衷説とも見られる。Ⅱは、Singapore 海



峽の南を限る Bintang 島の南部の西端 Rhio (Riouw) 説で、是非は姑く措き、全く新しい見解である。Ⅲは

Malay 半島南端 Johore 説の踏襲に過ぎぬ。また羅越國の名義上よりいへば、Ⅰは新史料を利用した Wurauri (Worauri) 説であり、Ⅱは、Rhio (Riouw) 説に外ならぬが、Ⅲは、少しも名義に觸れてゐない。さればⅢは、位置上からだけであるが、ⅠとⅡとは、位置上及び名義上から、共に羅越國に比定してゐるのである。

いふまでもなく、馮承鈞氏は曩に Pelliot 氏の Deux itinéraires de Chine en Inde à la fin du ^Ⅹ siècle. (BEFEO, W, 1904. 所收)の本文だけを抄譯して、『交廣印度兩道考』(上海、民國二十二年)を出してゐるが、このⅢは、全くそれに基づいたもので、固より

新しい説ではない。たゞさうした譯書を除き、支那人自らの著した文獻では、從來、この説が見えてゐなかつた爲め、こゝに擧げたまでである。白壽彝氏の『中國交通史』(上海、民國二十六年一月、頁一三四)に「亦据『交廣印度兩道考』と明記しながら、羅越國の下に、「當在馬來羣島之南部」と註せるは「馬來半島之南部」の誤なることいふまでもなからう。

Ⅱは、南條氏が、「最近新嘉坡日本人會長西村竹四郎氏の實際的考證を得て」、「同氏の考證に多分の正確さを感じるので、以下それに従ふ」とて、この新説を提唱されてゐるのであるが、奈何せむ、謂ふところの「實際的考證」たる、殆んど全く歴史的考證を缺き、ためにその成立の可能性さへ疑はれるほどのものなることである。これに就いての私の批判は、同説の發表された『中外日報』紙上に於いて、「南條蘆夫氏の『南冥悲史の人、眞如法親王』を讀む」と題し、昭和十二年六月八日より同十五日に至る間、七回に亘つて連載されてゐる故、再びこゝにこれを繰返さうとは思はぬ。

Iの説の收められた『史學科研究年報』は、臺北帝國大學文政學部より、私もその惠贈を辱うしたのであ

るが、それを受領した時、拙稿は、既に印刷所に廻されてゐたので、辛うじて再校正刷の際、追記に一言斷つて置くに過ぎなかつた。この説は、爪哇及び暹羅の史料によつてゐるといふ點で、最も留意すべきものである。

爪哇の史料では、東爪哇の Erlangga 王統の Dharmawangsa 王の時、敵が Woerawari から侵入して、都を陥落し、王を戦死せしめたことや、次の Erlangga 王(1010—1042)が、1031年頃、Woerawari 侯を襲撃したことなど、さうした史實が傳へられてゐるけれど、この Woerawari が何處であるか、それは、この史料だけでは判然せぬ。Van Stein Callenfels 氏は、これを想定して、Sumatra の室利佛逝(Srivijaya)即ち三佛齊に當てゝゐるが、G. P. Rouffaer 氏の解釋に従ふと、それは Johore 河の下流域といふことになる。

桑田教授は、Erlangga の史料に見える Wijayaを「室利」佛逝又は「三」佛齊とすれば、同じ史料の Woerawari は、これと別物であるやうに見えるとなし、勢ひ Rouffaer 氏の説に傾かれた。Rouffaer 氏は、Woerawari の都 Luarām, Lwarām の名を解釋し、古代

爪哇語 Iwah “rivier, stroomend (zoet) water” と、梵語 ram=rāma “liefelijk” との綜合とし、その都の名が、河を意味する上に、Woerawari そのものも、“klaar (van) water” の意味の古代爪哇語と解し、Woerawari 國を Johore 河流域に比定したのである。桑田教授は、この Woerawari を以て、「羅越或ひは羅衛と似た名」であると考へられた。

次に暹羅の史料では、Palatine Law of Siam ともいふべき、1360 年の Kot Mophherabān の中に、南方屬國の一として、Worawāri のあるに注意された。これを紹介された Gerini 氏は、この Worawāri を、Malacca の南の河 Muār に比定したが、桑田教授は、Worawāri が羅衛、従つて羅越に似てゐるところから、これを爪哇史料の Woerawari と同様に見做して、兩者を Wurawari にてあらはし、「Wurawari は、Jehor より寧ろ Tumasik [淡馬錫=Singapore] に比定したるが、Rouffaer 氏の Wurawari の語義の解釋が若し正當とすれば、Jehor 河流域に當てるがよい。或は Tumasik と Jehor 河口と近い所であるから、兩方を一つに考へてよいかも知れぬ」と説き、以て羅衛、従

つて羅越が、位置上、名義上、Wurawari に相當するものと考へられた。

この羅越=Wurawari (Worawāri) 説は、從來顧みられなかつた、爪哇及び暹羅の史料を利用してゐる新説ではあるが、それらの史料たるや、史料それ自身がこの説を決定してゐるのではなく、史料の解釋如何によつて、かくの如き説も立てられるといふ程度を出でぬ。そこで以上とは別箇の解釋も、不可能でないであらう。

先づ名義の上に於いて、Wurawari の國名は、「羅越或は羅衛と似た名」であり、[Wu] rawar [] の如く、その名の頭尾を省けば、羅越(或ひは羅衛)の對音と認められないこともないかも知れぬ。されどこれを Laut (Lawat) に比定するのと、いづれが妥當性に富むであらうか。況してこの邊の土人が、唐代は勿論、それよりも古くから馬來人 (Orang Malayu) であり、彼等の間に話された語が、大體に於いて今日の如き馬來語 (Bahasa Malayu) であり、従つて山手の住民 (Orang Bukit) に對して、海邊の住民 (Orang Laut) と呼ばれた Laut 人の國が、唐代の支那に羅越國とし

て傳へられたと考へられるに反し、唐代よりも後に爪哇の勢力が及んだと思はれるこの地方に、唐代既に爪哇風の名であるといふ *Wurawari* が存したとせねばならぬに於いては、いづれが妥當性に富むであらうか。

更に重要なるは、位置の點である。爪哇史料に見える *Wurawari* の都 *Luam*, *Lwarim* が *Rouffaer* 氏の説くが如く、「河」の意味であるとしても、またその *Wurawari* が、同氏の言ふが如く、「淡水」の意義を持つてゐるにしても、何故それらを *Johore* 河下流域に比定せねばならぬのであるか。この點、*Rouffaer* 氏の説によつても、それを補はれた桑田教授のそれに於いても、首肯し得るに足る必然的な理由が見出されぬ。

次に暹羅史料によるとせば如何。*Kot Morpheraban* には、暹羅の南方屬國の中に、*Worawari* と共に、*Ujong Tanah* を擧げてゐる。*Ujong* は馬來語 *Hudjong* で「端」であり、*Tanah* は「地」であるから、*Ujong Tanah* は「地の端」を意味し、それが地名としては、地形上、馬來半島の南端 *Johore* の古名として用ゐら

れたことはいふまでもない。既に *Ujong Tanah* が *Johore* である以上、それと共に別國として擧げられた *Worawari* を *Johore* と解することはできぬ。教授は、「自分の考へでは島夷志略の羅衛が *Wurawari* [*Worawari*] と似て居ると思ふ。羅衛は唐宋の羅越と思はれるので、爪哇の *Erlangga* 王の時代の *Wurawari* も同じと見ることが出来る」といはれるが、若し然りとせば、暹羅史料の *Worawari* が、*Johore* であり得ない限り、これと「同じと見ることが出来る」爪哇史料の *Wurawari* も、*Johore* であるとは考へ難く、従つてこの *Wurawari* を *Johore* 河下流域に比定することはできぬ筈ではなからうか。

そこで教授は、「*Wurawari* は *Jehor* より寧ろ *Tumasik* [淡馬錫=Singapore] に比定したいが *Rouffaer* 氏の *Wurawari* の語義の解釋が若し正當とすれば *Jehor* 河流域に當てる方がよい。或は *Tumasik* と *Jehor* 河口と近い所であるから、兩方を一つに考へてもよいかも知れぬ」と結ばれたが、たとひ *Rouffaer* 氏の *Wurawari* の語義の解釋が正當であるとしても、それは必ずしも *Wurawari* を *Johore* 河流域に當て

ることが正當であるといふことにはならぬ。それ故若しこれだけで判断するとせば、教授の望まれる如く、「Wurawari は Johore より寧ろ Tumasik に比定」されてよい譯である。従つて「或は Tumasik と Johore 河口と近いところであるから、兩方を一つに考へてよいかも知れぬ」といふが如き、苦しい解釋は不要にならう。現に Singapore にも、Singapore 河があるので、Rouffaer 氏の Wurawari の語義の解釋をこの河に當てるなら、それにて不都合はなくなるでなからうか。

桑田教授が「Wurawari を」Jehor より寧ろ Tumasik に比定したい」と思はれるのは何故であらうか。支那史料では、『島夷志略』の羅衛の故名「實加羅山を Singhapura にあてゐることは不可能とは思はれぬ」から、「同書の羅衛は Singhapura 地方」で、「賈耽及宋史の羅越も同様に考へ」られるため、羅越＝羅衛＝實加羅山＝Singhapura となり、更に教授は、「自分の考へでは島夷志略の羅衛が『暹羅史料の』Wurawari [Worawari] と似て居ると思」はれ、「羅衛は唐宋の羅越と思はれるので、爪哇の Erlangga 王の時代の Wurawari も同じと見ることが出来る」といはれるので、即ち羅

越＝羅衛＝Wurawari となる。然るにまた『島夷志略』の淡馬錫は、Nagarakretagama に見える Tumasik に當り、而して「Tumasik 即ち Singhapura」であるから、結局、羅越＝羅衛＝Wurawari＝Tumasik＝Singhapura＝Singapore となる。これ桑田教授が、「Wurawari は Jehor より寧ろ Tumasik に比定したい」と望まれた所以であらう。

かくて同教授の説は、「羅越＝Johore 説と、羅越＝Singapore 説との對立から、己むを得ず兩説を「一つに考へてよいかも知れぬ」と苦しい結論を引き出されたが、教授の考は、羅越＝Johore 説よりも、寧ろ羅越＝Singapore 説に傾いてゐられるやうに見受けられ、而して教授の所論の跡を辿つて來ると、前述の如く、羅越＝Singapore 説に歸せしめることは不可能ではなう。

併しながら、この羅越＝Singapore 説の一つの礎石となつてゐる「實加羅山を Singhapura 地方にあてゐることは不可能とは思はれぬ」といふのであるが、實はそれには、何等確證のある譯でない。さればこれを基礎として、元代の羅衛より唐代の羅越に洩り、羅越を

Singhapura に比定することは、如何かと思はれる。唐代の羅越には、唐代の記録が存する限り、それに據つて解釋するのが、至當の筈である。羅越國の位置に關してはいふまでもなく、かの唐の貞元の宰相賈耽の『皇華四達記』に基づく、「至_三海峽。蕃人謂_三之質。……北岸則羅越國」といふのが、最も據るべきもので、而してこの海峽が、Malacca 海峽でなく、Singapore 海峽に相違なく、その Singapore 海峽が、今日の新海峽にあらずして、舊海峽 (Selat Tebrau) を指すものであると解せざるを得ない限り、却つて羅越 = Singapore 說よりも、羅越 = Johore 說の妥當なることは、曩に私が、『羅越國問題』に於いて縷述した通りである。

かくの如く考へて來ると、羅衛と共に、羅越を Wurawari (Worawari) に比定することは、名義上、位置上、共に難色あるを免れぬ。

桑田教授は、Wurawari の語義が、Rouffier 氏によれば、古代爪哇語の淡水を意味するといふので、支那史料の淡港を想起し、これを「瀛涯」勝覽の文に従ひ、淡港即ち彭家門 [Banka Str.] の入口と見ると、

藤田博士の云はれる如く、淡港は Palembang 河口でよい。……[島夷]志略の淡港も同じ所とすれば、爪哇史料の Wurawari はこの淡港ではあり得ない」といつてゐられるが、それは、Wurawari を Rouffier 氏に従つて、Johore 河下流域に比定された爲めであつて、既に前述の如く、Wurawari が、必ずしも Johore 河下流域に限定されねばならぬ理由がないとすれば、それは、この淡港だつてよゝ譯である。然る時は、淡港は、Palembang 河口で、Palembang 即ち室利佛逝又は三佛齊に、爪哇史料の Wijaya を比定するとして、その勢力下にあつたと思はれるのが、Wurawari を Srijaya と解した Calentfels 氏の想定が、却つてこれに近いではなからうか。

さればとて私は、爪哇史料の Wurawari を、三佛齊の勢力下なる淡港に比定し、暹羅史料のそれをも、同様であると斷定しようとは思はぬ。何故なら、今日までの材料だけでは、未だかゝる結論を下す自信を持つことができないからである。現に Sumatra 島東岸の咄魯 (Aru) にも、「其國有_一港名_二淡水_一」と『瀛涯勝覽』に見えてゐる如く、淡水の稱を帶ぶる地名は、

他にもあり得るからである。たゞ淡港に就いては、かくも解釋ができるといふだけに過ぎぬ。さうした解釋も可能に見えるだけ、羅越 = Wurawari (Worawari) 説の基礎は、未だ強固とはいへぬ。それ故この新説も今日のまゝでは、到底私の得た結論に代り得ると思へぬ。これに就いては、私も尙研究してみたいと思ふ。

固より私は、羅越國を以て、馬來半島南端 Johore 地方にあつた Orang Laut の國であつたとする結論を固執するものでなく、またこの結論だけで満足してゐるものでない。たゞ今日までのところでは、かくの如く考へざるを得ないだけのことである。これに關する新説の出ることは、殊に眞説の現はれることは、私の最も希望に堪へないところである。私自身、また何とかして少しでも考證を進められはしまいかと、絶えず念願を續けてゐる。殊に眞如法親王の御遷化地たる羅越國が Romania 岬 (Tanjong Pénusok) より舊海峡 (Selat Tebrau) に至る Johore 海岸に於て、何處に寄港地を持つたであらうかは、私の特に關心を寄せてゐる點である。蓋し若しこの寄港地が明らかとな

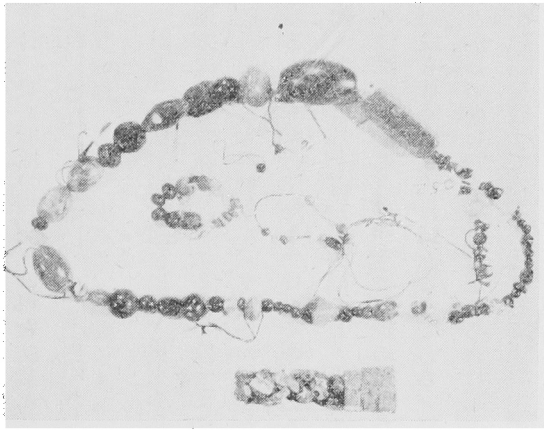
らば、恐らく法親王の御乗船もそこに立寄りたるに相違なく、御終焉地が羅越國である以上、こゝに至るまでの長途の航海による御老齡の御恙を、御寄港の上、御上陸になつて、保養せさせ給ふうち、遂に御遷化になつたとも拜察され、従つて御終焉の地も、その地方でなかつたかと想察されるからである。果して然らば Johore 海岸に於ける當時の寄港地が何處であつたかを知ることが、學徒としての一般的立場に於いては勿論、特に邦人としての特殊的立場から、大層意義あることにならう。

然るに『英國亞細亞學會雜誌』(*The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, July, 1937, pp. 467—470, plates I—W.) に G. B. Gardner 氏が「馬來半島南端と羅馬帝國との間に存したる古代海上交通の證跡としての Johore 河流域發掘の古代小玉」(Ancient beads from the Johore River as evidence of an early link by sea between Malay and the Roman Empire.) に就いて報道してゐるのを見ると、右の懸案に對して、考古學上から、何等かの示唆を與へてくれるやうに考へられる。そこでその大

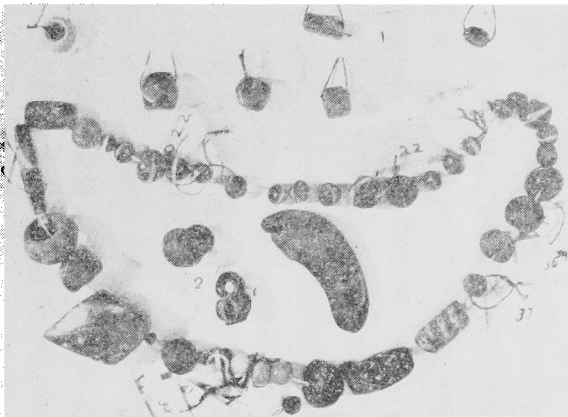
意を次に紹介しようと思ふ。

Gardner 氏の Johore 河流域發掘に於いて、その地點は明確に示されていないが、その下流域の古るさうな

のであると思はれ、六〇〇ほど集められた小玉の中、凡そ二〇％は、羅馬帝國のものとして分類され、これらの代表的な實例は、寫眞で示されてゐる。羅馬といふのは、エジプトに於けると略々同じ意味で用ゐられ、基督紀元最初の二又は三世紀に於ける或る時から起る意である。



Indien Beads.



Roman Beads from the Johore River.

No. 1 is Hittite, No. 2 are Phoenician or Cypriot.

ふのは、エジプトに於けると略々同じ意味で用ゐられ、基督紀元最初の二又は三世紀に於ける或る時から起る意である。これらの上に、八〇ばかりの古いイタリヤの石小玉があつた。たまさかにもヒツタイトの石小玉が一つあつて、それは B. C. 700 のものであり。また B. C. 7

場所で、氏は、他の物と共に、澤山の古い小玉や寶石を蒐集した。幾分粗末な寶石は、皆で八〇〇ばかり出たが、それらは後の時代よりも、早い時代の印度のもの

頃、イタリヤで作られたものに似た一つの硝子小玉や、フエニキヤ又はキプロス型の二つの硝子小玉があつた。その他の残りは、大抵、アラビヤか後世の歐羅

巴か、明らかにその本地を定め難い、粗末な硝子のものであつて、多分、地方的に作られた、一見古い時代のものであつた。」

「問題は、如何にして、また何時、これらの羅馬の小玉が、馬來半島南端に達したかといふことである。それらが羅馬時代に來たか。アラブ商人によつて齎らされたか。印度の注釐(Chola)諸王の時代に持來られたか。たゞしは A. D. 1500 以後、歐洲商人によつて齎らされたか。」Gardner 氏は、これらに對して次の如く考へた。

「歐洲商人によつて齎らされたかも知れぬといふ、最後に擧げた思ひ付きは、有りさうでないとして除かれるであらう。歐洲商人は、歐羅巴の硝子小玉を、多數に、且つ安價に得ることができ、そして事實これを得たので、彼等が、古代のものだけを扱つたといふが如きは、ありさうでなく、また歐洲商人の齎らしたものなら、今回見出されたそれらの中に、歐羅巴の硝子小玉の多數がありさうであるのに、その見出されないのは、どうも彼等歐洲商人の齎らしたものと考へられぬ。」

「同じ議論は、或る程度、アラブ商人にも適用する。彼等は、勝れたる硝子を作り、彼等自身の製造に係る硝子小玉を用ゐてゐた。それで若し彼等がそれを齎らしたのなら、それらの間に、アラブの小玉を見出すのが、自然であるからである。」

「然るにその代りに、印度の石小玉や寶石がある。そこでそれらは注釐諸王の時代に齎らされたかといふに、彼等は、強き海上權を持つて居り、A. D. 1026頃、ニコバルやアングマン諸島及び恐らくケグダーまで征服したであらう。支那の正史たる『宋史』には、支那貿易の一方法として朝貢使を送つたところの、注釐の二王の名が記されてゐる。即ち A. D. 1033 (明道二年)には、尸離囉茶印他囉注囉(Śrī Rājendra Chola)・A. D. 1077 (熙寧十年)には地華加羅(Kulottunga, circa 1077—1118)・これである。」『宋史』卷四八九)注釐(Sanskrit Čōla; Malay Čulan; Arab Čūljān)國の條には、以上の外、大中祥符八年(1015)及び天禧四年(1020)・この國の王なる羅茶羅乍(Rajaratja)の遣使朝貢を載せてゐるが、これは王を呼ぶ普通名で、固有名でなくから、Gardner 氏は、これを擧げなかつたので

あらう。」

「馬來の年代記や民間傳承は、馬來人と、これらの印度諸王即ち *Rajah Kling* や *Rajah Chulan* との間の戦争や爭論で満たされてゐる。*Keling* は、すべて南印度人の馬來名で、*Orissa* の海岸なる *Kalinga* の民を意味する。〔それが爪哇にも移住したので、その多く住する爪哇の地方を、唐代には訶陵と呼んだ。訶陵はこの *Kalinga* の音譯である。〕*Winstedt* によると、*Raja Chulan* は、*Raja Chola* 即ち *Chola* 〔注輦〕王である。馬來の年代記は、*Raja Chulan* が、*Johore* 河の上流に *Kota Batu Itam* と云ふ一町の町を持つてゐたと報じてゐる。それを見たことがあるのが、*A. D. 1928* には、案内しようと申出た一人の人が生存してゐたが、この申出が聞かれないうち、その人は、*A. D. 1932* に死んで了つた。注輦の民が、これらの小玉を持來つたといふことは、全く有りさうではある。けれども、現在の知識では、これをも除外しようとしてゐるが、若し誰か *Johore* 河の上流を探検し、*Kota Batu Itam* 乃至は馬來人によつてそこにあるといはれる梵寺 *Chandi Bombon* を見出すなら、失はれたる證

跡が発見されるかも知れぬ。」

「商品は、普通に、それらの製造された時代に貿易される。而して印度や東洋と、羅馬とが貿易した證據は多い。それをこゝに繰返す必要はない。併しながら羅馬帝國からの商人が、他の物と共に、印度に硝子を持つて來たことは、特に一言するに價する。『エリトレヤ海航行記』(*Periplus [maris erythraei, circa 60 A. D.]*)には、*Malabar* に粗製の硝子が輸入されたこと、*Chryse* の島や *Damirica* (*Tamil* の國) の沿岸諸島産の鼈甲が、そこから輸出されたことなどを載せてゐる(*Schoff* 譯註 *The Periplus of the Erythraean Sea*, [New York, 1912.] p. 45 參照)。同『航行記』には、また *Damirica* 往復の途、*Camara*, *Poduca* 及び *Sopatma* に寄港する土人の船や、たゞの丸木を結び合せて作られた、*sangara* と呼ばれる、他の甚だ大きい船に就いて語つてゐるが、しかし *Chryse* や *Ganges* 河に旅行するところのものは、*colandia* と稱せられ、甚だ大きいことを載せてゐる(同上 p. 46)。同じ旅行家は、更に記して曰く、大海を右にし、海岸を左に航行すると、*Ganges* が見える。それに近く東方に突出た

最後の土地が、Chryse であらう。……この河 (Ganges) に丁度相對して、大海中に一島がある。東の方、旭日の下にある、人間の住む最後の部分である。それは Chryse と呼ばれる (同上 p. 47 以下) と。若し航海者が、これらの方向に従ふであらうなら、彼は、馬來名に Hujung Tanah (地の端) とし、Johore に於て、この Chryse を見出すであらう。」

「南印度と馬來群島との間に、古くから海上交通のあつたことも、他の史料から確かである。爪哇の史家は A. D. 70 以後、爪哇に、南印度人の種々の植民地の存在したことを傳へてゐる。これらの植民は、常に海上から來たといはれる。爪哇の Barabudur に於ける薄彫は、航行をした船舶の型を示してゐる。恐らくこれは曩の『航行記』に語られてゐる種類の船であらう。」

「馬來諸國は、いつも護謨、香及び香料で知られてゐた。而して羅馬人の要求は、定めし印度人の仲介者によつて、この貿易を盛んにしたであらう。その印度人は、寶石、石並びにその他の物の間に小玉をも含んだ、羅馬の物産を取入れ、それに對して、これら馬來諸國の物産を送り返すのであつた。かくて Johore 河に於

て、古代の寶石や石小玉と共に」 Gardner 氏によつて見出された「羅馬の小玉は、恐らく馬來半島南部と、印度及びそれより羅馬帝國との間に於ける、この早期の海外貿易を語る一端をなすものであらう。たゞ一つヒツタイトの小玉や、早期のイタリアの眼小玉 (eye-bead) が、より早期關係のあつた證據であるかどうかは疑問であつて、そのためには確證がない。」

かくて Gardner 氏は、かういつて結んでゐる。「この發掘は、最初のものであり、たゞ探索的行はれたものである。更に Kota Batu Itam を含む、注聲諸王と傳説にて結び付けられてゐる、Johore に於ける多くの廣い、手が着けられずにある場所は、もつと早い時代に開かれてゐたことをよく證明するであらう。すべてこれらの古代の場所は、適當な發掘の仕甲斐があらうし、この地方の古代史に、全く新しい光を投げるかも知れぬ。」

以上は、Gardner 氏の報道するところである。氏の Johore 河流域發掘により、出土した古い小玉や寶石が、果して氏の報するが如きものとせば、恐らく唐代にも Johore 河口 (Kuala Johore) から遡つた Johore

河(Sungei Johore)下流域が、東西交通の寄港地であり、寧ろ要衝であつたであらうとさへ想察される。當時の航路、船舶、航海術などと共に、海岸の状況を考慮しつゝ、これを地圖によつて按ずれば、かくの如き想像は、毫も不都合でないやうに感ぜられる。而して當時 Laut 人は、この河口附近から舊海峡附近に多く聚落したと思はれるので、その Laut に名を負ふ、眞如法親王の御終焉地としての羅越國が、Johore 河下流域であつたであらうと推定することは、當らずと雖も、決して遠くはあるまいと考へられるのである。

果して然らば、眞如法親王の御壯圖を景仰し、御最後を哀悼し奉るため、御遺蹟を偲ぶ記念碑は、これを新嘉坡に建てるより、勿論柔佛に建てる方がよいと思はれるけれど、同じ柔佛でも、出来るだけ實際の御遺跡に近い地點を求めるのが至當であると見做される限り、新嘉坡に程遠からぬため交通の便利な Johore Bahru (Johor Bèharu) 即ち新柔佛より、たとひ交通は不便であつても、寧ろ Johore 河の左岸にある Johore Lama (Johor Lāma) 即ち舊柔佛の下流域、印度の方面に近き右岸沿水の地に、これを建てる方がよいと思

はれる。蓋し舊柔佛は、A. D. 1511 に、葡萄牙人 D. Albuquerque のため、Malacca が陥つた時、その王の逃避して來た處で、從つて比較的奥地に遡つた處にあるが、それ以前の寄港地は、必ずしもそこまで遡らず、恐らくその下流域でなかつたかと思はれるからである。若しそれ實際にこれを建てるといふことになれば實地に就いて踏査するの必要なるはいふまでもない。^②

尙この建碑問題に就いて、一言附加して置かねばならぬ。それは建碑の目的と、その建設地とに關してである。若しその建碑の主目的が、親王の御遺蹟を顯彰し奉る點にあるなら、勿論實際の御遺蹟の地にこれを建てねばならぬ。實際にその御遺蹟の地が判然せぬなら、已むを得ず同地域に於いて、出来るだけ實際の御遺蹟に近い地を選んでこれを建てねばならぬ。親王と直接何等關係なき地に、御遺蹟顯彰の建碑をなすことの無意味なるは、固より言ふを俟たぬであらう。私がこの建碑地に關して上に述べたのは、即ちこの意味に於いてに外ならぬ。されど建碑の主目的が、必ずしもその實際の御遺蹟を顯彰し奉る點にあるのではなく、單に親王の御遺徳を奉讃するだけのものであるなら、さ

うした記念碑は、これを何處に建てゝも差支はなく、また幾ヶ處に建てられてもよい譯である。例へばかうした意味の記念碑なら、その建設地をば、新嘉坡市に求めようと、暹羅國盤谷府に定めようと、それは志ある士の自由意思に任されてよいと思はれる。たゞこの場合建碑の目的が何であるかを明記して、斷じて疑惑を後世に遺すべきでないことは、特に注意されねばならぬ。

最後に、この Johore の名が何に基づいたか、未だ詳らかにされてゐないこの名に就いて、試みに私の考を附記して置かう。かの Malacca 即ち Malaka が、*Phyllanthus emblica* の馬來名 Malaka より起り、^③Perang 島即ち Pulo Pinang が、檳榔の原名たる馬來名 Pinang に基^④き Batavia 即ち Jakarta(じやがたら)の古名 Kalpa (咬喙E) が、椰子の爪哇名 Klapa から出^⑤づ、Campā が、*Michelia champaca* の梵名 Champaka から生^⑥じ、Madjapahit の pahit は苦味の意であるが、Madja は、マメルロ(檳榔)の一種香園であり、^⑦『漢書』(卷二八下)地理志に見える皮宗が、^⑧Banana の馬來名 Pisang から起つたと思はれ、^⑧『梁書』

(卷五四)海南諸國傳の干陔利は、Banana の梵名 Kan-pai 若しくはその基づいた土名から出たものであらうと考へられる如く、所謂南海の方面に、植物名から起つた、若しくは起つたと思はれる地名は可なりに多い。そこでこの Johore 即ち Johor も、この邊に特有な *Pellucatax saccharinus* の馬來名 Johor から起つたのでなからうかと思はれる。植物の分布に精しい同僚理學博士堀川芳雄氏に尋ねると、この屬のものは、淡水が海水に交はる河口などの陸地に近き水中に生ずるもので、盛んに繁殖すると、陸地を造るとさへいはれるとのことである。この植物 Johor の生ずるところから推して、最初はこの河が Sungai Johor 即ち柔佛河と呼ばれ、次でその流域をも Johor と稱するに至つたものと察せられる。即ち Johor の名は私の考によると、最初、植物名より河名に附せられ、更に都名及び國名にまで發展するに至つたものであらうといふことになる。而してこの名が、河名としては兎も角それとて餘り古くから知られたとは思はれず、況してそれが都名及び國名となつたに於いては猶更のこと、必ずや歐人東漸以後の新しいことではなければならぬ。

まゝ。

支那で Johor の對音として柔佛の名が見え始めるのは、固よりそれ以後のことである。『明史』(卷三二五)柔佛傳に、「柔佛近彭亨(Pahang)。一名烏丁礁林。永樂中(1403—1424)鄭和遍歷西洋。無柔佛名」とある如く、明初にこの名は、まだ知られて居らぬ。同傳に、「萬曆間(1573—1620)其酋好構兵。鄰國丁機宜(Trengganu)・彭亨(Pahang)屢被其患。華人販他國者。多就之。貿易時或邀至其國。國中覆茅爲屋。列木爲城。環以池。無事通商於外。有事則召募爲兵。稱強國焉。地不產穀。常易米於鄰壤」云々とあるところから想像すれば、明末萬曆の頃に至つて、漸くその名が支那の方へ知られたのでなからうかと思はれる。現に萬曆四十五年(1617)に成つた張燮の『東西洋考』(卷四)には、柔佛の條が見出され、それより百二十二年後、清の乾隆四年(1739)に完成された前記『明史』の同傳は、殆んどこれに據つたと認められる。併しながらこゝに大切な報道で、前者にあつて後者に削られたものもないではない。『東西洋考』柔佛の交易の條に、「土人時駕小舟。載方物。走他

國易米。道逢貢舶。因就他處爲市。亦有要之入彼國者。我舟至。止都有常輪。貿易只在舟中。無復舖舍」云々といふ、圈點を附した部分の如き、これである。

要するに Johor は、十六世紀の初頃、その地方に特有なる植物名より起つた稱で、これを漢字にて音譯した柔佛は、支那では明末に至つて漸く現はれたに過ぎないけれど、その沿岸地方、特に Johor 河(Sungei Johor)の下流域沿岸地方は「貿易只在舟中」といふが如き、主として舟上生活をなす Orang Johor 即ち Orang Laut の唐代以前から占據してゐたところだ、問題の羅越國も、畢竟この方面の Orang Laut の國=Laut 人の國=Laut 國であると考へられることに、今尙變りはない。たゞ本稿起草の目的は、消極的には、この考と兩立しない說で、前の「羅越國問題」にて觸れなかつたものを批判檢討し、積極的には、考古學上の新發掘による成果を利用して、何らかこの問題の解決に資せむとするにあつた。その結果、前者からは、結局、前に得た結論以外に出ることのできないことが、明らかにされ、後者からは、唐代羅越國の寄港地が、

後の Johor 河の下流域沿岸地方と認められるに至つたので、従つて眞如法親王の御遷化地をば、從來漠然と馬來半島南端 Johor 地方と考へてゐたのを、更に Johor 河下流域沿岸地方と限定してみることができたのである。こゝに於いてこの補遺は、前の「羅越國問題」の解決に對して、一面には、異説の反駁によつて益々その妥當なることを強調するものであり、他面には、考古學の援助によつて、更にその上に一步を進め得たものであるといへないであらうか。

註

- ① 昭和十一年十一月廿一日、京都帝國大學文學部支那學會第三十周年記念大會に於いて述べたる「羅越國に就いて」は、この「羅越國問題」の範圍以上には出なかつた。
- ② 以上は昭和十二年十一月廿三日、同學部東洋史談話會にて「羅越國問題の補遺」の題下に、發表したといふに基づき、記述したものである。これ以外に「羅越國問題」の拙稿に對し、訂補を加へねばならぬ點も多々見出されるが、それは別の機會に譲る外ない。

- ③ J. Crawford, *A Descriptive Dictionary of Indian Islands and Adjacent Countries*. (London, 1856, p. 24 3.)

H. Yule and A. C. Burnell, *Hobson-Jobson*, (London,

1903, p. 544.)

- ④ Crawford, *op. cit.* (p. 331.)

Yule and Burnell, *op. cit.* (p. 695.)

- ⑤ 古賀十二郎「長崎方言集覽」(『長崎市史』風俗篇、長崎、大正十四年、附録、頁三一七)

- ⑥ G. Maspero, *Le royaume de Champa*. (Young Pao, XI, 1910, p. 156, n. 2;—Leide, 1914, p. 2, n. 2;—Paris, 1928, p. 2, n. 2)

G. P. Malasekera, *Dictionary of Pali Proper Names*. (London, 1937, Vol. I, p. 856.)

- ⑦ 松岡靜雄譯補『瓜哇史』(東京、大正十三年、頁一〇三及五一〇五註六)

- ⑧ 藤田豊八「前漢に於ける西南海上交通の記錄」(『藝文』第五年第一〇號、大正三年十月、頁三七。『東西交渉史の研究』南海篇、東京、昭和七年、頁九)

- ⑨ J. Przyluski, *Indian Colonisation in Sumatra before the Seventh Century*. (*Journal of the Greater Indian Society*, Vol. I, No. 2, July, 1934, pp. 100—101.)

- ⑩ R. J. Wilkinson, *A Malay-English Dictionary*. (Singapore, 1903, p. 239.)

(昭和十二年十二月十二日)